

表題： 質量統合情報収集のための社会調査手法の開発

—大学生の自由述懐情報の収集と解析をケースとして—

要旨； これまでの既成感を排して新たな視点で社会を考えることや今後の持続可能な社会システム構築の必要性が高まっている今日の社会において、個々人の中に眠っている独自の考えや意見を抽出し、真の気持ちや心理を汲み上げて統合化することが社会全体の意識や意向とできるような調査者の恣意性を出来るだけ排除した社会や市場の調査手法が求められている。本研究は、過年度においてカウンセリング理論であるSAT法(宗像 1997)を活用し、個々人の日常的エピソードと背後にある気持ち等の情報入力用システムを教材として長期間の入力調査を実施し、そこから得られたストレス影響因子に関する情報を使って個人の心理をモニタリングする手法を開発した。本稿はそれらを活用した発展的検討として、ある集団と時間断面でのモデル調査を実施して目標とする調査法および解析法が成立するのかについて検討した。

キーワード；社会調査手法，原因帰属理論，イメージスクリプト，SAT 法，心理モニタリング

金子 学(株建設技術研究所 国土文化研究所)

針尾 大嗣(摂南大学 経営情報学部)

宗像 恒次(筑波大学大学院 人間総合科学研究科)

【背景と目的】

産業、経済、雇用等、今日の社会の広い分野での抜本的な変化の必要性が求められつつあるが、それらの変化は社会システムの変革であると同時に、これまでの既成的な価値観を転換するといった人間個々人の認知のあり方や行動そのものを変容でもあるため、これまでのような社会の状況を把握するためには、事柄情報だけでなく、事柄の背後にある感情や心理特性を同時に把握できるような質量統合的な社会調査の方法が志向される。しかし、広範な市民の意向等の社会情報を把握する調査手法としては、情報技術の進展した現代社会においてもアンケートのような指示的調査法となっている。しかし、近年人間の脳や認知の仕組みなどが明らかになるにつれ、指示的調査法の問題点が指摘されている。(Zaltman, 2003) また、上記の問題を解消するような非指示的調査法として、これまでは自由回答式調査(以下FA法)では、解答欄に書くための回答者の言語力や心理的ストレスの程度に回答の質が左右されたり、白紙回答になって情報収集ができないリスクも大きい。更には、自由記述情報は記号情報であるため、心理や情動の情報を直接的に取り出すことも難しい。

一方、筆者らは過年度において、社会全体に広がりを見せている抑うつなどの精神疾患に代表されるストレス問題を解決支援することを目的として、ウェブを通じて人間個々人が日常で感じるエピソードを単純な日記形式に沿って入力し、入力されたデータの蓄積から健康行動科学や健康心理学の諸理論に基づいた情動・心理傾向をモニタリングするような情報システムの開発と、システムを通じて観測される情報からストレス要因の探査とメンタルケアを行うようなパーソナルストレスマネジメントシステムの機序等について検討を行ってきた。そこで、開発した“日常・自然的に想起されるエピソード情報からメンタル情報を抽出する”ための手法・システムを応用して、事柄情報と同時に健康心理情報が取り出せるような質量統合化データ収集を目的とした社会調査法の開発と活用方法について検討した。具体的には、(1)上記のようなカウンセリング理論や心理療法の手法を応用することによって指示的調査法と非指示的調査法の折衷を図ることによってテーマ背後の感情や本当の要求などのストレス関連の心理情報を調査する手法を考案し、(2)(1)を教材とした場合の収集情報が期待している質的特性を有した情報の抽出手順等について検討と考察を行った。

【教材と方法】

(1) 質問票の作成

一般的に人間はFA法のように「思ったこと」を書くように指示されても、潜在的な(「大人としてこんなことを言っているのか」等の、本当に書きたいことに対する)無力感や脅威などの感情(恐れ)が含まれている場合、脳の機序から心的防衛機制が掛り、本当の要求を直感的に書くことが難しい。そこで、開発した教材では、カウンセリング理論の1つであるSAT法(構造化連想法 宗像, 1997)で用いられるトラウマ回避のためのイメージワークとカウンセリング法の手順を使って、テーマ背後の感情情報を引き出すことにより、心的防衛機制のハードルを下げて本当のエピソードや要求を出やすくする質問法を手順化した。具体的には[①イメージ想起トレーニングの実施 ②主題(“今の大学生活”)の提示 ③主題の背後に想起される感情 ④感情から想起される出来事・エピソード ⑤エピソード背後の要求 ⑥要求背後の自己イメージ ⑦想起される今後の行動 ⑧記述エピソードの要約化]の一連の

問い掛けに基づいた自由発想による情報収集を行うための調査票を作成した。

(2) 調査方法

本調査は開発教材のテストケースであり、主題と被験者集団の選定は実施の容易さを考慮すると同時に、既往研究との比較の容易性も考慮したものである。考案した上記の質問群を用いて筆記試験型のアンケート調査（表 1）を実施し、被験者の回答から主題「今の大学生活」に関する情動情報についてとりまとめた。具体的には出題者のガイダンスにしたがって、被験者が質問文を聞き、回答票に回答する筆記方式で、被験者個人に関する上述の質問に加えて、性別や受検時志望順位などの属性情報も合わせて回答してもらう方法を取った。

(3) 集計・解析方法

調査分析の前提となる心理モニタリング法は、メンタルヘルスに内的に影響すると考えられるエピソードに対する原因帰属の傾向“要求の傾向（自己/他者）(Abramson et al., 1978)”と“自己イメージスクリプト(宗像, 2006)”の2つの因子を軸として4つの“情動”に関する象限—1) 自立（自己肯定）感増大、2) 自己嫌悪・自己否定感増大、3) 自己肯定感減少（見捨てられ感増大）、4) 依存心増大—で構成される座標平面上に、それぞれのサンプル情報が適合する位置にプロットし、各軸に適合する情報を累積化して、属性などで区分された集団に応じて分布形を表現する方法で、その集団の総合的なメンタルヘルス特性をモニターし、集団間などによる比較を行えるようにしたものである（図 1）。この方法によって回答群を集計・解析して、別途継続的に実施している個人の経時的な調査の結果と比較して本研究が提案する調査手法の定性的な妥当性を検証した。そして、集計・解析プロセスや出力内容に関する改善点と効果的な利用法を検討した。

【集計・解析結果および考察】

1) 本調査法の情報収集法としての定性的検証

まず、本研究で考案したカウンセリング理論を活用した質問による調査法が、当初想定した情報収集機能を有しているかどうかを、(1)FA 法本来の目的を保ちながら記述率を高めるような“自由想起”の促進がなされているか、(2)それらの述懐情報は記述量に左右されず、読み取り可能な論理性が確保されているか、(3)調査者の恣意性を排除した情報収集がなされているか、の3項目の妥当性についての検証を行った。

その結果、無効票が 2/193 と自由記述法としては記入率が高く、収集された情報も記述例（表 2）のように述懐情報量が少なくてもエピソードの事柄と気持ちの関係性が要約されており、被験者個々人の思いを読み取ることを可能であった。また、エピソードも「周りを気にしてばかりのくせに自分ばかり大事。周りを傷つけている。楽しいけど不安が強い。しんどい。」や「自分が一番後ろを歩いている。みんな楽しそうにしゃべりながらキャンパス内を歩いているのに、自分はみんなの後姿を見ている。」等の現代学生の抱いている非常に個人的でデリケートな内容が自由にそのままのイメージで語られていた。更にエピソードをラベル化して分類すると、その種類も“友達”“講義・ゼミ”“部活”“就職”“性格”“能力”等といった多岐に亘っていることが確認できた。これらのことから、この方法は集団的な調査方法でありながら、FA 法が従来困難としていた想起の問題（空欄、無回答の多さ）の解決や被験者の物語情報（何について語ったか、どのような気持ちなのか等）を情報化が行わ

れ、それらの情報は調査者が最初に持っている調査対象への先入観等の潜在意識とを出来るだけ介さずに収集されていることから定性的には従来調査法を補足する機能を満たしたと考えられる。

2) 本調査法の情報解析法としての検討

本調査法は過年度実施した自由想起・経時調査法とは異なり、主題想起・時間断面調査であるため分析される心理情動傾向がその被験者個人の総合的な心理状況を表しているわけではないが、1) に示すように調査主題に対する心理特性は表していると考えられる。そこで、(1)ラベル化して分類したエピソード群の違いが心理情動分布に違い、(2)属性調査結果による属性の違い、(3).(1)と(2)の分析結果からの関連分析の3項目について検討した。

その結果、まず調査集団全体として、やや自己否定感が強い傾向があることが読み取れたが、その傾向は、図2のような今回収集サンプルの多かった代表的なラベル“性格”および“境遇”のエピソードを記述する学生では自己否定感が強いが、それと比べた場合には“友達”エピソードを記入する学生は、やや自立・自己肯定感の強い心理特性であることが読み取れる。一方で、学年、性別、サークル所属有無、アルバイト有無、携帯電話使用率等の属性別でも比較すると、所属なしのグループで自己否定感ベクトルが強かった。この2つの関係が要素還元的なつながりを持つかは別にしても、サークル加入者のほうが対人関係に対する意識が強いことを示していた(図3)。そこで、例示として所属サークル有無の2つの群を取り出し、(1)のベースとなっているエピソードラベルの出現量についての比較を行った(図4)。すると、所属している群では、部活動、友達や人間関係、性格、生き方等の対人および自分関連のラベルが多くなるのに対して、所属していないグループでは勉強やゼミ、就職、学歴、将来等の自分の未来や能力に関係するラベルが多くなっている特徴が見られた。

3) 考察

マイナス感情のエピソードがマイナス自己イメージを想起させるのは容易に理解できるが、プラス感情のエピソードであってもマイナス自己イメージを想起させやすい特徴が両学年ともに見られた。例えば表2のエピソードラベル“境遇”のように受身的な述懐である場合や、「いつも家に帰れば誰かが待っていてくれる」という喜びのエピソードであっても、その背後には自己イメージ(－)で自信の無い自分を感じている等のエピソードが多い。つまりこれらの物語りの根底には、自分にとって悪いことは自分の能力に帰属させやすい傾向だけでなく、良いことは偶然的に起こると考える傾向がある。これらの思考は生育期における失敗等の繰り返し起こる無力体験がもたらす認知特性があることが推察された。

【主要文献】

- 1) 宗像恒次：SAT療法, 金子書房, 2006
- 2) Gerald Zaltman, How Customer Think, Harvard Business School Press, 2003
- 3) 深谷昌弘編：ソシオセマンティクスを創る IT・ウェブ社会から読み解く人々の意味世界, 慶応義塾大学出版会, 2008
- 4) A. Sheikh 成瀬悟策訳：イメージ療法ハンドブック, 誠信書房, 2003
- 5) 奥富庸一, 橋本佐由理, 窪田辰政：大学生とその両親の保健行動に関する相互支援と心の健康状態との関連, ヘルスカウンセリング学会年報, 2005, Vol11

表 1 調査実施概要

調査名	大学生の日常意識に関する調査
実施場所	摂南大学 大阪府寝屋川市池田中町 178
調査対象	経営情報学部 学部生
実施方法	対面式。1 講義時間ごとに受講生全員が同時に同じ質問に回答
第一回	
実施日	2008 年 6 月 19 日 (木)
被験者	二年生
講義 1	50 名 (男 41 女 9)
講義 2	22 名 (男 15 女 6 不明 1)
合計	72 名 (男 56 女 15 不明 1)
第二回	
実施日	2008 年 12 月 16 日 (金)
被験者	一年生
講義 1	61 名 (男 52 女 9)
講義 2	60 名 (男 41 女 15 不明 2 無効 2)
合計	121 名 (男 93 女 24 不明 2 無効 2)

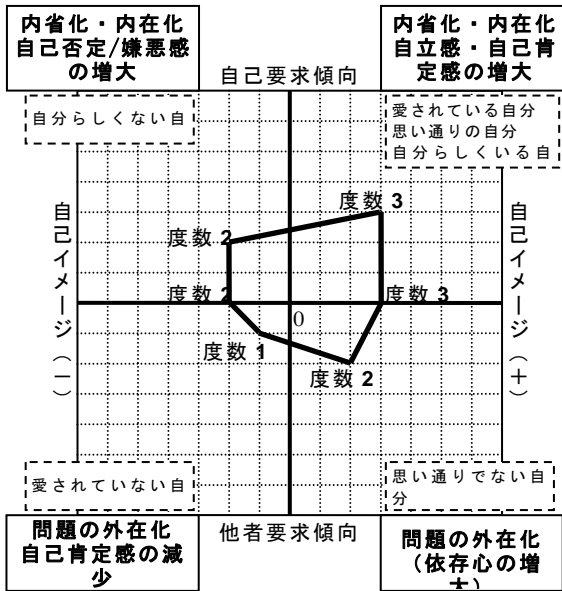


図 1 座標平面上的の位置に付与される意味と分布形の例

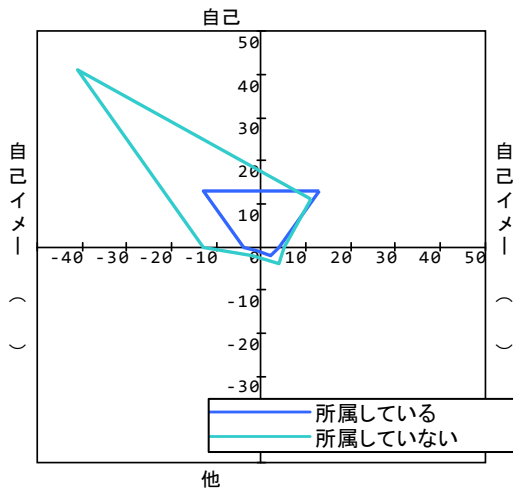


図 2 心情分布 (1)

表 2 本 で いた調査法による情報 例

質問 目	例
1 の大学生 を に例 ると	うすい灰色
2 1 での 感情に 置 ると	悲しみ・寂しさ
3 の感情 心の で	自信がない
3 の心の で 2 の感情の の大学生 に る	自分自身の学力のなさとふがいない自分にあきれる自分
本 よ た たら	(自己要求) あきらめそうになるが、自分の問題なので自力で解決することに全力でいく。 (他者要求) なし
要求を ると	ゼミの課題を提出したことで何か反応がもらえるかと思っただが、先生がこれではダメだと言ったことに自信をなくし悲しくなった。
い 自分 い 自分	早く終わらせようと急いでいて、しっかりとした実力が出せないでいる。
いい自分・悪い自分 の とを る と	悪いイメージの自分 指摘された部分を直し、じっくりとこれでのいいのか考える
1 ス (を 1 とし て)	学力の無さに対する苦勞 82

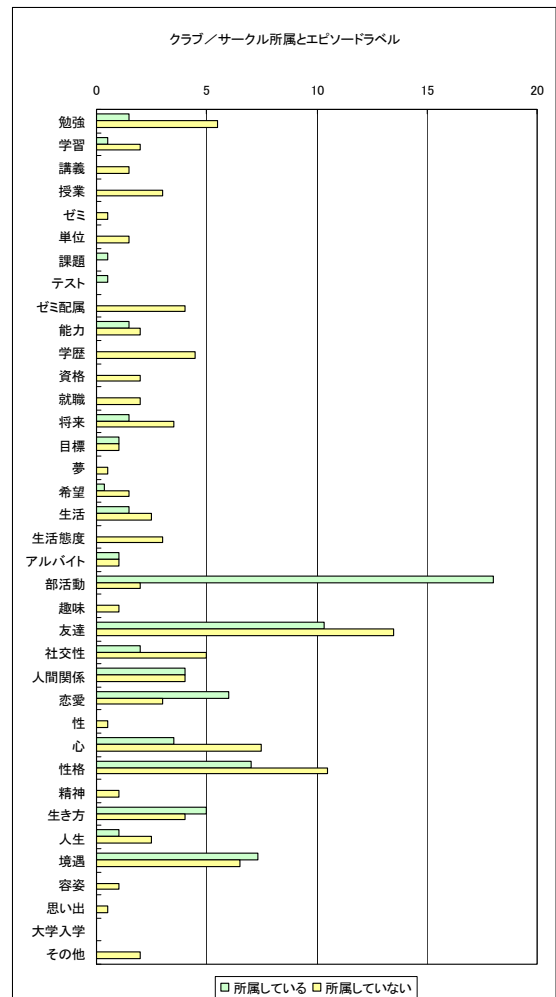


図 3 一 所 の 述懐 一 の

